

「生活の中で見られる意匠」

民具とは、日常生活において長い間使われてきた道具のことをいいます。これらの民具の中には、さまざまな意匠（デザイン）が施されたものがあります。

民具に施された意匠は、単なる飾りではなく、凶案化のもととなった植物や生き物からイメージされる意味をもっていることがほとんどです。日々の生活で使用するもの、特別なハレの日に使用するものなど用途が違っていても、そこには様々な願い、祈りがありました。

生活の中で民具を使用するたびに目にする意匠には、幸せな暮らしを願う人々の思いが込められています。意匠がもつ意味を考えながらその民具が使われた生活を想像していただけたらと思います。

○ビール瓶

瑞祥である麒麟（キリン）が描かれたビール



○重箱（じゅうばこ）

祭礼な年中行事などハレの日に弁当などを詰める箱。特別な日に用いるため漆塗りで豪華に仕上げている。

四君子（蘭、竹、菊、梅）（左）、橘（右）の柄が描かれている。



○衝立（ついたて）

元は間仕切りのない古い日本家屋で仕切りとして使われていた。襖や障子が使われるようにあると、玄関口や座敷に立てて隔てとした。

表には扇が、裏には風景画や詩が貼り付けられている。



○福熊手（ふくくまで）

熊手はその使用法から福をかき集める縁起物とされる。種々の縁起物を付けて売られる。福杷（ふくさらえ）とも呼ばれる。お千代保稲荷では正月に買う人が多い。



○木型（きがた）

和菓子職人が落雁を作るときの型で、これにたねとなる砂糖とみじん粉を混ぜたものを詰めて形を作る。野菜の意匠は法事の引き菓子として用いられた。 昆布、わらび、蓮根。



○和本（わほん）

『菓子図帳』。和菓子職人が菓子の盛り付け方を水彩画や鉛筆画で描いたもの。



○飼料袋（しりょうぶくろ）

養鶏業者が用いる鶏用の飼料が入っていた袋。



○絵双六（えすごろく）

絵双六は江戸時代から登場した遊びで今では正月の遊びとなっている。元はインド発祥で奈良時代に中国から伝わった盤双六である。

日本歴史童話双六旭光社繪雑誌春季増刊（大正 14 年 1 月 5 日発行）



○兜（かぶと）

兜は 5 月 5 日の端午の節句にて武者人形と共に飾られた。5 月の田植神事で用いられていた菖蒲が尚武と掛けられるようになり武者装束が飾られるようになった。山中鹿之助の兜。三日月と鹿の角がついている。



○真鯉（まごい）

鯉幟は 5 月 5 日の端午の節句にて庭前や門に立てたもので元は江戸時代に武家が立てた幟に裕福な庶民が対抗して立てたものである。緋鯉は主に黒色の真鯉の次に飾られた。戦後、子鯉が飾られるようになり母親の役となった。



○羽子板（はごいた）

女の子の無病息災を願って贈られた縁起物で正月に厄払いとして撞かれていたのが始まりである。元は胡鬼板という笏に似た粗雑なものだったが室町時代になり蒔絵が施されるようになり江戸になって役者の似顔絵等の押絵のものも登場した。



○宗和膳（そうわぜん）

来客に出す食事を載せて用いた台でちゃぶ台以前に使われていた。宗和流茶道の祖である金森宗和が好んだ事からこう呼ばれる。布着とは補強や見た目を丸くするときに行う漆塗りの工程の一つで木地に布を着せる事をいう。



○弁当箱（べんとうばこ）

仕事や学校等の家以外で主に昼食をとる為に飯や惣菜を入れるのに用いた容器である。アルミ製は明治後期に登場し、それ以前は曲げ物や竹や柳で編んだ弁当行李が用いられていた。



○高田徳利（たかだとっくり）

江戸時代の貧乏徳利にその祖形に持つもので、作品の様な形状は幕末明治期頃に登場する。多治見市高田地区で生産された事から高田徳利と呼ばれる。器面には酒屋などの屋号が入るのが特徴である。昭和 25 年頃まで作成されていた。稲荷町にあった稲松酒造のもの。



○樽型徳利（たるがたとっくり）

高田徳利と同じく酒屋が酒を入れて販売した樽型の徳利である。購入した客は飲み終わり空になった徳利に再び酒を入れてもらい購入した。多治見市高田で生産される以前は長崎県波佐見から仕入れられていた。昭和 20 年頃まで生産されていた。山川酒造（左）。井上醤油醸造（右）。



○手焙り（てあぶり）

手先を温めるために用いた小型の火鉢である。小型であるために容器と炭火が近くなる事から本体には耐火性のある陶器や金属が用いられる。



○火鉢（ひばち）

熱源用に電熱器を仕込んだ火鉢である。電熱器は戦後昭和 20 年頃から盛んに製造され、薪等の燃料が少なくなっていた事もあり広く普及していった。また大きさが五徳に近く炭火の替わりに仕込まれる事もあった。現在でも茶道の稽古用に用いられる。



○鏡立て（かがみたて）

柄鏡で姿を見るときに立てかけておくための台である。別名として鏡懸け・鏡架とも呼ばれる。



○鏡匣（かがみばこ）

婚礼道具の一つである柄鏡を収納するための箱である。柄鏡用の箱。朱塗り、家紋(五三桐)入り。



○柄鏡（えかがみ）

姿見用の和鏡で鏡と同じ材質の柄が取り付けられている。鏡面部には錫と水銀の合金が塗られている。和鏡の形状は室町時代までは円鏡が主で室町時代後期になり柄鏡が登場した。江戸時代には婚礼道具の一つになり鏡背に松竹梅や鶴亀等の寿模様が用いられるようになった。明治になり西洋からガラス製の鏡が伝来するまで用いられた。鏡師の刻印に天下一と受領国名の両方が用いられるのは1772年以降の時期である。



○瑠璃絵皿（ほうろうえざら）

食器や酒器又は茶器や菓子器を載せて運ぶ縁のある平たい器。瑠璃は、金属の表面にガラス質の釉薬を高温で焼きつけてもの。工芸品の場合、七宝と呼ばれる。



○のれん

商家で屋号・店名などをするし、軒先や店の出入口にかけておく布。また、それに似た、室内の仕切り、装飾などに用いる布。のんれん。ぬうれん、ともいう。こののれんは、風呂屋で使っていた。



○塚枕（あずちまくら）

日本髪を結ったときに使う高く作った枕。江戸時代には鬘を結っていたので、箱枕の上に小さい括枕をつけて高くしたものが使われ、これを塚枕といった。



○虻凧（あぶだこ）

大正の頃に流行した凧あげ用の凧。



○吉祥文様(きっしょうもんよう)とは

繁栄や長寿を表し、縁起が良いとされる文様（柄）のひとつ。

様々なお祝いの品、日用品、着物や帯、工芸品などにあしらわれてきました。また、お祝いの他にお守りや厄除けの意味もあり、その種類は数十種類にもなります。

日本の吉祥文様の代表的なもの

- 鶴亀、桃、菊、熨斗(のし)、兎(うさぎ)など・・・長寿
- 葡萄(ぶどう)、瓜(うり)、唐子(からし)など・・・子孫繁栄
- 桐、麻、竹など・・・成長祈願
- 七宝、宝船、扇など・・・栄達
- 琵琶、藤、鯉、鶏など・・・昇進
- 鴛鴦(おしどり)、相生(あいおい)の松、貝など・・・夫婦円満
- 雪輪、雀など・・・豊作
- 薬玉(くすだま)、瓢箪(ひょうたん)など・・・健康